

Title	同性愛者に対する態度の規定因に関する検討：ジェンダー自尊心と性役割規範の観点から
Author	鈴木, 文子 / 池上, 知子
Citation	人文研究. 66 巻, p.67-86.
Issue Date	2015-03
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学大学院文学研究科
Description	高坂史朗教授退任記念

Placed on: Osaka City University Repository

同性愛者に対する態度の規定因に関する検討： ジェンダー自尊心と性役割規範の観点から¹⁾

鈴木文子 池上知子

本研究は、異性愛者の同性の同性愛者に対する態度と自身の性別に基づく自尊心（ジェンダー自尊心）との関連を検討した。実験1では、男性異性愛者を対象に、異なるタイプのゲイ（男性的または女性的）を提示し感情反応を測定した。その結果、ゲイに対する態度において、ジェンダー自尊心やゲイのタイプの影響は認められなかった。ただし、同性愛者と異性愛者の間に生物学的な相違がないと明示された場合に、女性的なゲイよりも男性的なゲイに対する好感度が低くなっていた。実験2では、女性異性愛者を対象に、異なるタイプのレズビアン（女性的または男性的）を提示し感情反応を測定した。ジェンダー自尊心が高いほどレズビアンに好意的であること、さらに女性的レズビアンよりも男性的レズビアンに否定的であることが示された。しかし、同性愛者と異性愛者が生物学的に同じであると伝えられた場合、ジェンダー自尊心が高いほどポジティブ感情が低減し、さらにタイプによる感情反応の差も消失した。このように、男性異性愛者と女性異性愛者では、同性の同性愛者に対する態度形成におけるジェンダー自尊心の役割や生物学的情報の機能がかなり異なっていることが示唆された。

序論

一般に、男性は女性を、女性は男性を恋愛や性愛の対象とする異性愛が当然であるかのように考えられている。実際には、恋愛感情や性的魅力を同性に対して感じる同性愛、異性と同性の両方に対して感じる両性愛、またはどちらの性にも感じない無性愛など、人々の性指向には多様性が認められる。しかし、多様な性が容認されつつある一方で、異性愛以外の性指向に対する偏見や差別は依然として根強く存在している。たとえば、昨今、ヨーロッパを中心に同性婚を法的に認める国が増えつつあるが、アフリカの多くの国では、現在もなお、同性愛行為は違法とみなされている。現在の日本においても、法律上、同性婚は認められておらず、同性愛者に対する法的保障は十分確立されているとはいえない。また、若年層の男性において、性指向が異性愛以外の人々の自殺未遂経験率が、異性愛者の約6倍であることが報告（Hidaka, Operario, Takenaka, Omori, Ichikawa, & Shirasaka, 2008）されており、異性愛者でない者が生きにくさを感じていることも窺える。その背景に、異性愛者以外の者に対する偏見があることは否めないであろう。そうした偏見の解消には、異性愛者以外の者に対する態度がどのように規定されているのかを解明することが大きな課題である。本研究は、その中でも同性愛者

に対する偏見に焦点をあて、社会の大多数を占める異性愛者の同性愛者に対する態度がどのように規定されているのかについて検討を行う。

これまでの多くの研究で、同性愛者に対する態度には性差が認められることが指摘されている。一般に男性の方が女性よりも同性愛者に否定的である (Hoover & Fishbein, 1999)。また、男性同性愛者 (以下、ゲイ)の方が女性同性愛者 (以下、レズビアン)よりも否定的態度を向けられやすい (Kerns & Fine, 1994)。これらからわかるように、男性のゲイに対する態度が最も否定的であると考えられてきた (Kite & Whitley, 1996)。さらにゲイについても、男性的なゲイよりも女性的なゲイの方が否定的態度を向けられやすいといった知見 (Laner & Laner, 1979)が存在する。

Falomir-Pichastor & Mugny (2009) は、男性のゲイに対する態度が最も否定的になる理由について、男性と女性とではジェンダー・アイデンティティの構成基盤が異なり、特に男性中心の西欧社会においては、異性愛であることが女性性より男性性においてより大きな重みをもつからだと論じている。また、Herek (2002) は、男性がゲイに対して否定的な態度を示すのは、同性愛者がジェンダー規範から逸脱しているために非難の対象となるからだけでなく、男性は、自分自身の男性らしさを示すために自分が異性愛者である (ゲイではない) と証明することを強く求められているからではないかと述べている。

上述の議論に基づき、Falomir-Pichastor & Mugny (2009) は、男性異性愛者がなぜゲイに対して否定的態度を取るのかを社会的アイデンティティ理論の枠組みを用いて検討した。社会的アイデンティティ理論 (Tajfel & Turner, 1986) では、自分が所属する集団 (内集団) が他集団 (外集団) にはない優れた特徴をもつことで、集団所属性に基づく肯定的な自己概念を形成し、自尊心を維持または高揚させると考えられている。したがって、外集団が内集団と類似し、両者の弁別性が曖昧になると、外集団に対して差別的態度を示すことで明確な弁別性を維持しようとする (Branscombe, Ellemers, Spears, & Doosje, 1999)。つまり、外集団に対する否定的態度は、自身の集団所属性に基づく自尊心を維持または防衛するための方略であるといえる。そこで、Falomir-Pichastor & Mugny (2009) は、自身の性別に基づくアイデンティティへの自己評価をジェンダー自尊心 (“gender self-esteem”) と定義し、ジェンダー自尊心と同性愛者に対する態度との関連を男女で比較した。すると、男性の場合は、ジェンダー自尊心が高いほど、同性愛者に否定的になる関係が見られたが、女性ではそのような関係が認められなかった。さらに、男性にみられたジェンダー自尊心と同性愛者への否定的態度の関係が、同性愛者と異性愛者の間に生物学的に相違があることが示されると (具体的には、異性愛者と同性愛者の遺伝子や脳の構造に関する架空の情報をを用いて両者の弁別性を操作すると) 消失することを見出した。また、生物学的に相違があると伝えられると、伝えられない場合に比べ、同性愛者に対する態度も好意的になった。以上の結果から、Falomir-Pichastor & Mugny (2009) は、男性異性愛者にとってゲイの存在は男性アイデンティティへの脅威であり、ゲイ

に対する否定的な態度は、男性異性愛者と男性同性愛者の弁別性を明確にし、男性としてのジェンダー自尊心を維持するための方略の一つであると結論づけている。日本の男性異性愛者を対象に、Falomir-Pichastor & Mugny (2009) と同様の検討を行った鈴木・池上 (2012b) では、同性愛者と異性愛者で生物学的相違がないと明示された場合にのみ、ジェンダー自尊心が高いほどゲイに対する態度が否定的になる関係が出現することが示されている。これは Falomir-Pichastor & Mugny (2009) の示す、ジェンダー自尊心が高いほど同性愛者に対する態度が否定的であるという関係が、生物学的に相違があると伝えられることで緩和されるといった結果と厳密には一致していないが、集団間の弁別性が曖昧な状況において、ジェンダー自尊心を維持する方略が強化されやすいという点では、理論的には矛盾しない結果である。

ところで、女性的な特性を持つ男性はゲイであると判断されやすいといった知見 (Deaux & Lewis, 1984) があることから、同性愛者は自身の性別に応じた性役割規範から逸脱しているといったイメージが一般社会に流布していることが窺える。Falomir-Pichastor & Mugny (2009) の結果からは、男性異性愛者にとって、ゲイとの生物学上の弁別性が明確であることは、ゲイによるジェンダー自尊心への脅威を低減させ、結果として否定的態度が緩和されると考えられる。では、ゲイが社会の性役割規範から逸脱した特徴を示すことは、集団間の弁別性に寄与し、ジェンダー自尊心を維持するための否定的態度が緩和されるのだろうか。先述したように多くの場合は、性指向が異性愛でなく、他の行動・態度も性役割規範から逸脱しているいわば二重の逸脱者に対してより否定的な態度が向けられる傾向にあり (Laner & Laner, 1979)、性役割規範からの逸脱が集団間の弁別性に寄与するわけではないと考えられる。

現在の社会において、同性愛者の生物学的基盤が明らかにされていないわけではない。さらに、性指向自体は不可視的である (石丸, 2008) ことから、同性愛者を外顕の手がかりによって可視的または客観的に見分ける方法はなく、誰が同性愛者であり、誰が異性愛者であるのかといった集団間の弁別性は明確でないといえる。異性愛者と同性愛者の集団間の差異が曖昧な状況では、同性愛者が性役割規範から逸脱した特徴を示す場合、むしろ同じ男性として男性集団の規範を脅かす存在として知覚され、ジェンダー自尊心を防衛するための否定的態度を強化するのではないだろうか。自身の男性らしさに脅威を与えられた男性は、男性的なゲイよりも女性的なゲイに対してより否定的になる (Glick, Gangl, Gibb, Klumpner, & Weinberg, 2007) ことから、男性異性愛者はジェンダー自尊心を維持するために脅威となる対象に対して、より否定的になっているとも考えられる。

上記の議論から、本研究は、男性異性愛者の男性的なゲイと女性的なゲイに対する態度の違いも、Falomir-Pichastor & Mugny (2009) の提唱するジェンダー自尊心を維持する心理機制による説明が可能かについて検討することで、これまでのジェンダー自尊心と同性愛者に対する態度の関連についての知見をさらに広げることを目的とする。

一方、上記のような男性異性愛者のゲイに対する態度においてみられるジェンダー自尊心と否定的態度の関係が、女性異性愛者のレズビアンに対する態度においても認められるかどうかは、議論の余地がある。鈴木・池上(2012a)は、女性異性愛者のレズビアンに対する態度とジェンダー自尊心の関係について検討を加えているが、女性異性愛者においては、ジェンダー自尊心が高いほどレズビアンに対して肯定的になる関係を見出している。さらに、同性愛者と異性愛者の間に生物学的な差異がないことが明示されると、そうした関係が消失する傾向にあることが示唆されている。これらの結果からは、女性異性愛者はレズビアンを、同情を向け支援すべき社会的マイノリティ集団ととらえており、女性性の中核とされる、思いやりをもって人と接するなどの共同性(土肥・廣川, 2004)をレズビアンに対して発揮することでジェンダー自尊心を維持していることが考えられる。しかし、生物学的には同性愛者と異性愛者が同じであるといった情報が与えられると、レズビアンを同情や支援の対象とみなすことが困難になり、ジェンダー自尊心が高いほど寛容になる関係が消失したのではないかと推察される。女性は男性に比べ同性愛を生得的であると考えられる傾向にあると報告されている(Haider-Markel & Joslyn, 2008)ことから、女性異性愛者においては、同性愛者は本人の統制が困難である特徴をもつ集団としてとらえられており、生物学的相違に関する情報は統制が可能か否かを知る手がかりとして機能し、生物学的に同じであるという情報は統制可能である(生得的ではない)との認識を促した可能性がある。このように、女性異性愛者のレズビアンに対する態度におけるジェンダー自尊心は、男性異性愛者のゲイに対する態度とは全く異なる規定因として機能していると考えられる。

ただ、一方で、女性的なレズビアンより、男性的なレズビアンに否定的な態度が向けられやすいことも明らかになっている(Laner & Laner, 1980)。女性異性愛者にとっても、レズビアンが示す性役割規範からの逸脱とみえる男性的特徴は、ジェンダー自尊心への脅威となり否定的態度を喚起する要因であるのかもしれない。しかしながら、同性愛が生得的であり、統制不可能であるという認識が明確化されると、性役割規範からの逸脱に対する否定的反応は低減され、ジェンダー自尊心が高いほどレズビアンに対する肯定的(擁護的)態度が促進されるという関係が、そうでない場合に比べ一層強化されると予想される。逆に、性指向は非生得的で統制可能であり、レズビアンが支援や同情を示す対象としてとらえられなくなると、性役割規範から逸脱している特徴をもつ者に対してより否定的になると考えられる。このように、女性異性愛者においては、生物学的相違に関する情報が、男性異性愛者の場合とは異なる形で、ジェンダー自尊心とレズビアンに対する態度との関係、さらにレズビアンのタイプによる反応の差異に影響を与えている可能性がある。言い換えると、ジェンダー自尊心の高さは、レズビアンに対する擁護的態度を予測する一方で、性役割規範からの逸脱に対する非難と結びつく側面も備えている可能性があり、それらが同性愛者の生物学的情報によって規定されているのかもしれない。

しかし、これまでのところ、女性異性愛者のレズビアンに対する態度とジェンダー自尊心との関連はあまり検討されていない。Falomir-Pichastor & Mugny (2009)においても、女性異性愛者を対象に、生物学的情報を操作した検討は行われていない。したがって、本研究では、女性異性愛者のジェンダー自尊心にみられる2つの心理機能、レズビアンに対する擁護的態度を促す機能と性役割規範からの逸脱に対して非難感情を喚起する機能が存在することを確認する。さらに、そうした異なる機能が、生物学的情報による性指向の生得性に関する手がかりによって規定されていることを明確にすることを通じて、女性異性愛者のジェンダー自尊心とレズビアンに対する態度における、より詳細な心理機制を明らかにすることを目的とする。本研究の実験2では、女性異性愛者に対して、男性異性愛者のゲイに対する態度を検討する場合と同様に、同性愛者についての生物学的な相違に関する認識を実験的に操作し、女性異性愛者のジェンダー自尊心とレズビアンに対する態度との関係を検討する。さらに、女性的または男性的なレズビアンを提示し、生物学的相違に関する情報によってそれらへの感情反応がどのように異なるのかについても検討を行うこととした。

実験1

男性異性愛者はゲイをジェンダー自尊心への脅威ととらえており、その脅威に対する防衛機制として、ゲイ集団との弁別性を明確にすべく、ゲイに否定的態度を取っていると前提に立ち、以下の仮説を検討する。

仮説1 男性異性愛者は、ジェンダー自尊心が高い者ほど、ゲイに対して否定的反応を示すが、男性異性愛者とゲイの間には生物学的相違があると伝えられ、ゲイ集団との弁別性が明確になると、そのような関係は緩和される。

仮説2 男性異性愛者は、男性的ゲイより女性的ゲイに対して否定的反応を示しやすく、その傾向はジェンダー自尊心が高いほど顕著に現れる。換言すると、ジェンダー自尊心がゲイに対する否定的態度を促進する傾向は、男性的ゲイより女性的ゲイに対してより顕著になる。ただし、男性異性愛者とゲイの間には生物学的相違があると伝えられ、ゲイ集団との弁別性が明確になると、そのような関係は緩和される。

方法

実験参加者と手続き

日本の大学生77名（男性72名、その他3名、不明2名）を対象に、大学の心理学関連の授業の開始前または終了後に集団質問紙法により実施した。実験参加の依頼にあたっては、同性愛者に対する態度を調べることを目的としていること、回答は自由意志によることなどを質問紙の表紙に明記し、口頭でも説明を行った。

質問紙の構成

1. 性別 まず、性別について「男性・女性・その他」から選択してもらった。性別の質問項目において、「その他」と回答した者や無回答の者には、続くジェンダー自尊心に関する回答は求めず、次頁に進んでもらうように指示した。

2. ジェンダー自尊心 Falomir-Pichastor & Mugny (2009) の用いた3項目を和訳し使用した（「自分が男性／女性であることに誇りを持っている」「自分が男性／女性であることに満足している」「自分が男性／女性であることを重要に考えている」）。回答者の性別に応じて該当する項目に7件法（“1. 全くそう思わない”～“7. 非常にそう思う”）により回答を求めた。

3. 生物学的情報の提示 相違あり条件では、同性愛者と異性愛者では脳の活性化の様子や遺伝子の構造が異なっているといった内容の架空の解説文を、相違なし条件では、同性愛者と異性愛者は脳の活性化の様子や遺伝子の構造は全く同じであるといった内容の架空の解説文を提示した。各条件の参加者は、解説文を読んだ後に操作確認のため同性愛者と異性愛者の生物学的相違に関する3つの質問項目（e.g., 「同性愛者と異性愛者は、生物学的に異なっている」）に7件法（“1. 全くそう思わない”～“7. 非常にそう思う”）で回答した。統制条件では解説文は提示せず、参加者は生物学的相違に関する質問にのみ回答した。解説文や質問項目は、Falomir-Pichastor & Mugny (2009) が使用したものを和訳し、日本語として不自然にならないように文章や言葉を補い作成した。

4. ゲイの提示および態度測定 2人のゲイについての記述文を提示し、それぞれの人物に対する好感度（1項目、7件法：“1. 全く好感が持てない”～“7. 非常に好感が持てる”）、感情評定（「尊敬」「落ち着く」などのポジティブ感情6項目、「嫌悪」「戸惑い」などのネガティブ感情6項目、7件法：“1. 全くそう感じない”～“7. 非常にそう感じる”）を求めた。2人の人物のうち、一方の人物は男性的であることを、他方の人物は女性的であることを示すように記述文を作成し、予備調査を行った。予備調査では、本実験に参加しない大学生および大学院生17名（男性8名、女性9名）に、性格特性などが記述された2人の人物についての文章を提示し、それぞれどの程度男性的または女性的と思うか“-4. 非常に男性的”～“+4. 非常に女性的”の9件法により回答するよう求めた。予備調査の時点では、人物の性別および、ゲイまたはレズビアンであるかについての記述は加えなかった。予備調査の結果、男性的であることを想定した文章（ $M=-2.76, SD=0.66$ ）と女性的であることを想定した文章（ $M=1.88, SD=1.32$ ）の間に有意な差（ $t(16)=11.57, p<.001$ ）が認められた。また中点（0）との比較においても、それぞれ0.1%水準で想定した方向の有意差が認められた（男性的想定文章： $t(16)=-17.16, p<.001$ 、女性的想定文章： $t(16)=5.89, p<.001$ ）ため、これらの記述文を本実験で使用することとした。人物の記述文および本実験の回答項目については、Laner & Laner (1979, 1980) や Glick *et al.* (2007) を基に、日本文化に適した言い回しや語句に変更するなどし作成した。また人物の提示順序についてはカウンターバランスを行った。

5. 個人属性 最終頁において、年齢、性指向について回答を求めた。性指向の回答は、「異性愛・両性愛・同性愛・その他」から選択してもらった。

ディブリーフィング

最後に実験の真の目的を説明し、架空の解説記事が含まれていたこと、さらに同性愛者に関する様々な記述により不快な思いをさせた可能性に言及し謝罪した。

結果

分析対象

回答に不備のあったものを除き、性別を「男性」、性指向を「異性愛」と回答した 63 名（平均年齢 19.02 歳、 $SD=0.99$ ）を分析対象とした。統制条件 21 名、相違あり条件 20 名、相違なし条件 22 名。

尺度構成

ジェンダー自尊心 得点が高いほどジェンダー自尊心が高いことを示すように、使用した 3 項目の合計点を項目数で除した値を尺度得点とした ($\alpha = .79$, $M=4.98$, $SD=1.28$)。

ゲイに対する態度 人物に対する態度について、好感度については 1 項目（男性的ゲイ： $M=4.19$, $SD=1.32$ 、女性的ゲイ： $M=4.49$, $SD=1.35$ ）、感情評定はポジティブ感情 6 項目（男性的ゲイ： $\alpha = .83$, $M=3.13$, $SD=0.95$ 、女性的ゲイ： $\alpha = .85$, $M=3.19$, $SD=0.98$ ）、ネガティブ感情 6 項目（男性的ゲイ： $\alpha = .88$, $M=3.34$, $SD=1.14$ 、女性的ゲイ： $\alpha = .85$, $M=3.13$, $SD=1.10$ ）とし、それぞれの合計点を項目数で除した値を尺度得点とした。得点が高いほど、好感度およびそれぞれの感情を強く感じていたことを示す。

操作チェック

解説記事が、同性愛者と異性愛者の生物学的相違の認識に影響を与えたか否かを確認するため、操作確認に用いた 3 項目について生物学的情報に関わる実験条件間で比較した。1 要因の分散分析の結果、3 項目のうち 1 項目（「脳や染色体の違いによって、同性愛者や異性愛者を判断することができる」）について有意傾向であるが実験条件の主効果が認められた ($F(2, 60) = 2.94$, $p < .10$)。Bonferroni 法による多重比較を行ったところ、相違あり条件 ($M=3.70$, $SD=1.17$) と相違なし条件 ($M=2.77$, $SD=1.07$) の間に 10%水準の傾向差がみられ、相違あり条件は、相違なし条件に比べ、生物学的な相違を幾分明確に認識する傾向にあったといえる。しかし、統制条件 ($M=3.10$, $SD=1.48$) と相違あり条件、統制条件と相違なし条件の間には有意な差は認められなかった。ただ、素点を見る限り、相違あり条件 > 統制条件 > 相違なし条件といったように、操作意図に即した傾向が認められたため、実験操作はある程度有効であったと考え、仮説の検証のための分析を進めることとした²⁾。

仮説の検証

仮説を検証するために、ゲイに対する好感度、ポジティブ感情、ネガティブ感情それぞれを

従属変数とし、ジェンダー自尊心（連続変量、平均値により中心化）、生物学的情報（相違あり・相違なし・統制）、ゲイのタイプ（男性的ゲイ・女性的ゲイ）、およびこれらの交互作用項を独立変数とする一般線形モデルによる分析を行った。

ゲイに対する好感度

ジェンダー自尊心の主効果 ($F(1, 57)=0.22, ns$) 並びにジェンダー自尊心×生物学的情報の2要因交互作用 ($F(2, 57)=0.11, ns$) はいずれも非有意であった。したがって、仮説1から予測されるような、ジェンダー自尊心が高いほどゲイに対する好感度が低減し、異性愛者と同性愛者は生物学的に相違があると明示されると、そうした関係が緩和されることを示す結果は認められなかった。

さらに、ジェンダー自尊心×ゲイのタイプの2要因交互作用も非有意であった ($F(1, 57)=0.48, ns$)。したがって、ジェンダー自尊心が高いほどゲイに否定的になる関係が、男性的ゲイより女性的ゲイに対して顕著に見られるという傾向も認められなかった。加えて、ジェンダー自尊心×ゲイのタイプ×生物学的情報の3要因交互作用も非有意であり ($F(2, 57)=1.11, ns$)、生物学的な差異が明示されれば、ジェンダー自尊心への脅威が低減し、ゲイのタイプによる差も緩和されるとする仮説2を支持する結果も認められなかった。

ただし、ゲイのタイプによる主効果が有意となり ($F(1, 57)=4.05, p<.05$)、男性的なゲイよりも女性的なゲイに対する好感度が有意に高かった。さらに、生物学的情報×ゲイのタイプの2要因交互作用が有意であった ($F(2, 57)=3.40, p<.05$)。生物学的情報の条件ごとにゲイのタイプの差について下位検定を行ったところ、統制条件および相違あり条件では、男性的なゲイと女性的なゲイで好感度に有意な差はなかったが（順に、 $F(1, 57)=0.03, ns, F(1, 57)=0.00, ns$)、相違なし条件では、ゲイのタイプによる有意差が認められた ($F(1, 57)=11.17, p<.01$) (Figure 1)。つまり、生物学的には同性愛者と異性愛者は全く同じであると明示された相違なし条件において、女性的なゲイに比べて男性的なゲイに対する好感度が低くなること示されたことになる。なお、こうしたゲイのタイプによる違いは、ジェンダー自尊心の高低に関わらず同じように認められた。

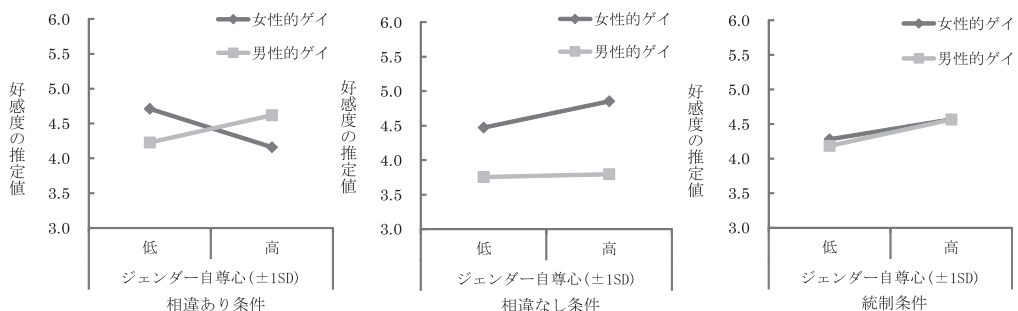


Figure 1. 生物学的情報の各条件のゲイ各タイプに対する好感度におけるジェンダー自尊心の効果

ゲイに対するポジティブ感情

ジェンダー自尊心の主効果 ($F(1, 57)=0.02, ns$)、ゲイのタイプの主効果 ($F(1, 57)=0.36, ns$)、生物学的情報の主効果 ($F(2, 57)=0.41, ns$) はいずれも有意でなく、また、ジェンダー自尊心×生物学的情報の2要因交互作用 ($F(2, 57)=0.83, ns$)、ジェンダー自尊心×ゲイのタイプの2要因交互作用 ($F(1, 57)=0.01, ns$)、ジェンダー自尊心×ゲイのタイプ×生物学的情報の3要因交互作用 ($F(2, 57)=0.88, ns$) も非有意であった。ポジティブ感情については、仮説1、仮説2に沿う結果は全く認められなかった。

ゲイに対するネガティブ感情

ジェンダー自尊心の主効果 ($F(1, 55)=0.73, ns$)、ゲイのタイプ的主効果 ($F(1, 55)=2.77, ns$)、生物学的情報の主効果 ($F(2, 55)=0.95, ns$) はいずれも有意でなく、また、ジェンダー自尊心×生物学的情報の2要因交互作用 ($F(2, 55)=2.00, ns$)、ジェンダー自尊心×ゲイのタイプの2要因交互作用 ($F(1, 55)=0.31, ns$)、ジェンダー自尊心×ゲイのタイプ×生物学的情報の3要因交互作用 ($F(2, 55)=0.82, ns$) も非有意であった。したがって、ネガティブ感情についても、仮説1、仮説2に沿う結果は全く認められなかった。

考察

男性異性愛者のゲイに対する態度において、仮説はいずれも支持されなかった。まず、仮説1について述べる。Falomir-Pichastor & Mugny (2009, study5) では、統制条件においてジェンダー自尊心が高いほどゲイに対して否定的になる関係が示され、相違あり条件ではそうした関係が消失していた。本研究では、統制条件においてジェンダー自尊心と態度の関係が確認されず、さらに相違なし条件や相違あり条件でもジェンダー自尊心の効果は認められなかった。先行研究 (Falomir-Pichastor & Mugny, 2009 (study5)) とは異なり、ジェンダー自尊心とゲイに対する否定的態度との間に関係が見られなかった理由の一つとして、文化的背景の違いが考えられる。先行研究の実施された欧米と比べ、日本では、性指向が異性愛であることが男性性を構成する重要な要素になっていないのかもしれない。同じく日本の男性異性愛者を対象とした、鈴木・池上 (2012b) においても、統制条件ではジェンダー自尊心とゲイに対する態度の関連が弱かったことから、それは窺える。性指向が異性愛であることが男性性にとって重要であるならば、男性異性愛者とゲイとの集団間の弁別性を明確にすることは男性としての自尊心を維持するうえで重要な意味をもつが、そうでなければ、男性としての自尊心を維持するために、ゲイ集団に対して否定的態度をとることによって対処する必要性は低下すると考えられる。あるいは、本研究と先行研究の違いは、研究が実施された時期の違いによるのかもしれない。本研究の実験1が実施されたのは、先行研究からも少なくとも4年以上経過している。冒頭で述べたように、昨今、同性婚を認める国が増えつつあるなど、同性愛をめぐる情勢はめまぐるしく変化している。そうした中で、日本の男性において、異性愛者であることは男性

としてそれほど重要な要素ではなくなっている可能性も考えられる。加えて、Falomir-Pichastor & Mugny (2009, study5) では、対象者の平均年齢が 25.16 歳であったのに対し、本研究は平均年齢が 19.02 歳と幾分若いことも考慮する必要があるだろう。若い年代ほど、性指向と男性性をあまり強く結びつけていない可能性もあるからである。

次に、仮説 2 について述べる。仮説 2 は、男性異性愛者は、男性的ゲイより女性的ゲイに否定的反応を向けやすく、それはジェンダー自尊心が高い場合により顕著になるが、生物学的に相違があると知らされると、ジェンダー自尊心による増幅効果が消失、緩和されるというものであった。これは、男性役割規範から逸脱している特徴を持つ女性的ゲイは、ジェンダー自尊心への脅威となるため、否定的反応を引き起こすが、生物学的情報により異性愛者と同性愛者の集団間弁別性が確保されると、その脅威が低減されるという主張が根拠となっている。しかし、本研究では、仮説 2 を支持する結果は得られなかった。現代の日本においては、性指向以外の行動様式や趣味などの側面においても、伝統的な男性役割規範に則ることが男性性を維持する上で特に重視されなくなっている可能性もあり、今後こうした側面を含めて検討する必要がある。

一方、仮説とは異なり、同性愛者と異性愛者が生物学的には同じであると明示された場合において、女性的なゲイよりも男性的なゲイに対して好感度が低くなることが示された。これは、生物学的特徴においてゲイとの差別化が困難な場合は、行動様式や趣味などの側面で男性異性愛者と変わらない特徴をもつゲイの存在は、集団間の弁別性を二重に曖昧にするためではないかと考えられる。そのため、女性的特徴をもつゲイのほうが、弁別性を高めるように知覚され、好感度が高くなったのかもしれない。これまで、男性的なゲイよりも女性的なゲイに対して否定的であることが多くの研究で示されてきたが、本研究の結果から、生物学的情報による同性愛者との弁別性の有無によって、その態度が逆転する可能性が示唆されたといえよう。ただし、ここで見られたゲイのタイプによる違いは、ジェンダー自尊心との関連が認められていないため、女性的ゲイの存在が男性異性愛者のジェンダー自尊心の維持防衛に寄与していると直ちに結論づけることはできない (Figure 1 参照)。

なお、男性的ゲイよりも女性的ゲイに対するほうが、好感度が高くなった理由に関しては、昨今の日本のメディアの影響も考慮する必要がある。日本のテレビ番組では、2006 年～2009 年に放送された『おネエ☆MANS!』(日本テレビ)のように、生物学的には男性であるが、女装していたり、女性的な話し方をする人物が登場する場面が多く見受けられる。厳密にはそうした人物が必ずしも男性同性愛者(ゲイ)であるわけではないが、彼らは“おネエ系ゲイ”と呼ばれ、同性愛者とほぼ同様に扱われている。ある対象に対する接触頻度が高くなると、その対象への好意度が増す単純接触効果という現象が知られているが (Zajonc, 1968)、メディアに登場する“おネエ系ゲイ”との接触頻度の高さが、女性的なゲイに対する好意度を高める一因になった可能性も考えられる。さらに、メディアにおけるポジティブな描写がなされている

同性愛者を思い出すことが、ゲイに対する態度をポジティブに変容させるという知見 (Bonds-Raacke, Cady, Schlegel, Harris, & Firebaugh, 2007) があることから、メディアへの接触によって好意度が高まった“おネエ系ゲイ”が想起され、女性的なゲイに対する態度をポジティブなものにしている可能性も考えられる。ただ、本研究の場合、男性的ゲイより女性的ゲイの好感度が高くなるという傾向は、同性愛者と異性愛者は生物学的に相違はないと伝えられた相違なし条件のみでみられ、統制条件や相違あり条件ではみられていない。これは、統制条件や相違あり条件においては、女性的ゲイに対する性役割規範からの逸脱への非難とメディアの影響による好意的感情が拮抗し効果が相殺されたため、ゲイのタイプによる差が生じなかったのに対して、相違なし条件では、集団間の弁別性の低下に伴い、男性的なゲイに対しての脅威が喚起され、女性的ゲイへの好感度が高まり両タイプの間には差が生じた可能性も考えられる。今後より詳細な検討が必要である。

実験 2

実験 2 では、序論で述べた鈴木・池上 (2012a) の知見に基づき、女性異性愛者は、レズビアンを統制困難な特徴をもつ対象、それゆえ同情を向け支援すべき対象としてとらえており、レズビアンに対して女性性の中核をなす寛容な態度を示すことによってジェンダー自尊心を維持しているという前提に立ち、次の仮説を検証する。

仮説 1 女性異性愛者は、ジェンダー自尊心が高いほどレズビアンに対して好意的になるが、そのような関係は、同性愛者と異性愛者は生物学的に異なると明示的に知られると一層明確になるのに対して、同性愛者と異性愛者は生物学的に同じであるという情報が与えられると不明確になる。

また、これまで実証的に明らかにされていないが、上述の議論を踏まえ、女性異性愛者にとって、レズビアンが性指向以外の側面で性役割規範から逸脱した特徴をもつことは、ジェンダー自尊心への脅威となり非難感情を喚起するが、それは性指向が非生得的で統制可能であると認識されている場合に限られると考える。性指向が生得的で統制不可能であると認識されている場合は、性役割規範からの逸脱を許容できるようになると考え、以下の仮説を立て検討する。

仮説 2 女性異性愛者においては、女性的レズビアンより男性的レズビアンに否定的反応が示されやすく、その傾向はジェンダー自尊心が高いほど顕著になりやすい。ただし、このような傾向は、同性愛者と異性愛者が生物学的に同じであると伝えられた場合に限り認められ、同性愛者と異性愛者は生物学的に異なると認識されているときは、女性役割規範から逸脱している男性的レズビアンへの非難が低減し、レズビアンのタイプによる差が見られにくい。

方法

実験参加者と手続き

日本の大学生 93 名（すべて女性）を対象に、大学の心理学関連の授業の開始前または終了後に集団質問紙法により実験を実施した。実験参加の依頼にあたっては、同性愛者に対する態度を調べることを目的としていること、回答は自由意志によることなどを質問紙の表紙に明記し、口頭でも説明を行った。

質問紙の構成

実験 1 とほぼ同様の構成であった。ただし、提示する 2 人の人物についての記述内容は、「男性同性愛者（ゲイ）」を「女性同性愛者（レズビアン）」、「男性との恋愛経験」を「女性との恋愛経験」に変更した。

結果

分析対象

回答に不備のあったものを除き、性別を「女性」、性指向を「異性愛」と回答した 81 名（平均年齢 18.83 歳、 $SD=1.12$ ）を分析対象とした。統制条件 27 名、相違あり条件 27 名、相違なし条件 27 名。

尺度構成

ジェンダー自尊心 得点が高いほどジェンダー自尊心が高いことを示すように、使用した 3 項目の合計点を項目数で除した値を尺度得点とした ($\alpha = .77, M=4.83, SD=1.15$)。

レズビアンに対する態度 各人物に対する態度について、好感度については 1 項目（女性的レズビアン： $M=5.47, SD=0.89$ 、男性的レズビアン： $M=4.44, SD=1.06$ ）、感情評定はポジティブ感情 6 項目（女性的レズビアン： $\alpha = .88, M=3.53, SD=1.10$ 、男性的レズビアン： $\alpha = .82, M=3.18, SD=0.94$ ）、ネガティブ感情 6 項目（女性的レズビアン： $\alpha = .90, M=2.61, SD=1.04$ 、男性的レズビアン： $\alpha = .89, M=2.90, SD=1.15$ ）とし、それぞれの合計点を項目数で除した値を尺度得点とした。得点が高いほど、好感度およびそれぞれの感情を強く感じていたことを示す。

操作チェック

解説記事が、同性愛者と異性愛者の生物学的相違の認識に影響を与えたか否かを確認するため、操作確認に用いた 3 項目について生物学的情報に関わる実験条件間で比較した。1 要因の分散分析の結果、3 項目のうちの 1 項目（「脳や染色体の違いによって、同性愛者や異性愛者を判断することができる」）について実験条件の主効果が有意であった ($F(2, 78)=3.48, p < .05$)。Bonferroni 法による多重比較を行ったところ、相違あり条件 ($M=3.78, SD=1.34$) と相違なし条件 ($M=2.81, SD=1.57$) の間に 5% 水準で有意差がみられ、相違なし条件より相違あり条件のほうが、生物学的な相違を認識していたといえる。統制条件 ($M=3.19, SD=$

1.11) と相違あり条件、統制条件と相違なし条件の間には有意差は認められなかった。しかし、素点を見る限りでは、相違あり条件>統制条件>相違なし条件といったように、操作意図に即した傾向が見られたため、実験操作はある程度有効であったと考え、仮説の検証のための分析を進めることとした²⁾。

仮説の検証

仮説を検証するために、レズビアンに対する好感度、ポジティブ感情、ネガティブ感情それぞれを従属変数とし、ジェンダー自尊心（連続変量、平均値により中心化）、生物学的情報（相違あり・相違なし・統制）、レズビアンのタイプ（女性的レズビアン・男性的レズビアン）、およびこれらの交互作用項を独立変数とする一般線形モデルによる分析を行った。

レズビアンに対する好感度 (Figure 2)

ジェンダー自尊心の主効果 ($F(1, 73)=1.16, ns$) は有意でなかったが、ジェンダー自尊心×生物学的情報の2要因交互作用が有意であった ($F(2, 73)=3.81, p<.05$)。そこで下位分析を行ったところ、統制条件においてのみジェンダー自尊心の単純主効果が認められ ($F(1, 73)=8.24, p<.01$)、相違あり条件および相違なし条件においては、ジェンダー自尊心の単純主効果は認められなかった（順に、 $F(1, 73)=0.83, ns$ 、 $F(1, 73)=0.00 ns$ ）。統制条件において、ジェンダー自尊心が高いほどレズビアンに対する好感度が高くなるという関係がみられ、そのような関係が相違なし条件において消失したという結果は仮説1に沿うものであった。ただ、相違あり条件においても同様に両者の関係が消失したことは予測とは異なっていた。

仮説2から予測される生物学的情報×レズビアンのタイプの2要因交互作用は有意ではなかった ($F(2, 73)=0.02, ns$)。ただし、レズビアンのタイプによる主効果は有意であり ($F(1, 73)=42.78, p<.001$)、生物学的相違に関する情報やジェンダー自尊心の高低に関わらず、男性的なレズビアンよりも女性的なレズビアンに対する好感度の方が有意に高かった。

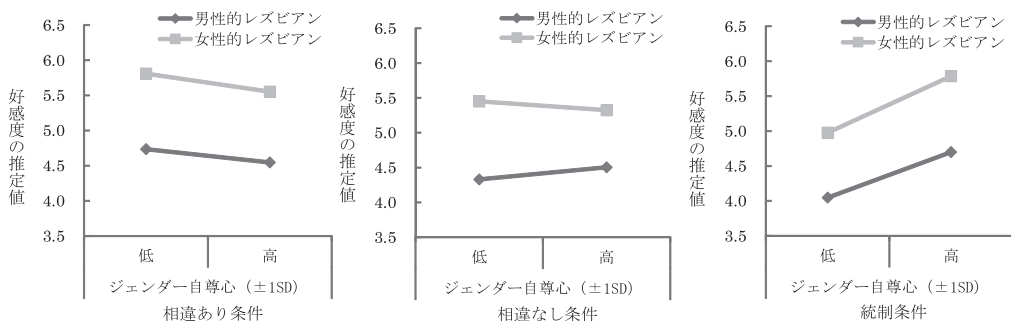


Figure 2. 生物学的情報の各条件のレズビアン各タイプに対する好感度におけるジェンダー自尊心の効果

レズビアンに対するポジティブ感情 (Figure 3)

ジェンダー自尊心の主効果 ($F(1, 75)=8.40, p<.01$) は有意であり、ジェンダー自尊心が高いほどポジティブ感情が低減していた。さらに、ジェンダー自尊心×生物学的情報の2要因

交互作用が有意であった ($F(2, 75)=3.27, p<.05$)。下位分析を行ったところ、相違なし条件においてのみジェンダー自尊心の単純主効果が認められ ($F(1, 75)=9.86, p<.01$)、ジェンダー自尊心が高いほどレズビアンに対するポジティブ感情が低減していた。統制条件および相違あり条件においては、ジェンダー自尊心の単純主効果は認められなかった (順に、 $F(1, 75)=0.01 ns, F(1, 75)=2.38, ns$)。

レズビアンのタイプによる主効果が有意であり ($F(1, 75)=16.38, p<.001$)、さらにレズビアンのタイプ×生物学的情報の2要因交互作用が有意であった ($F(2, 75)=4.38, p<.05$)。下位分析を行ったところ、統制条件および相違あり条件では、女性的なレズビアンよりも男性的なレズビアンに対するポジティブ感情の得点が低いという、レズビアンのタイプによる有意差もしくは傾向差 (順に、 $F(1, 75)=21.45, p<.001, F(1, 75)=3.28, p<.10$) が認められたのに対し、相違なし条件ではレズビアンのタイプによる差はみられなかった ($F(1, 75)=0.31, ns$)。これは生物学的な差異が明示されると、レズビアンのタイプによる感情反応の差が縮減されるとする仮説2に反する結果であった。

加えて、有意傾向ではあるが、ジェンダー自尊心×生物学的情報×レズビアンのタイプの3要因交互作用 ($F(2, 75)=3.06, p<.10$) がみられたため、下位分析を行ったところ、統制条件においてのみジェンダー自尊心×レズビアンのタイプの単純交互作用が有意であった ($F(1, 75)=7.26, p<.01$)。ジェンダー自尊心が高い場合 (+1SD) と低い場合 (-1SD) の下位検定を行ったところ、ジェンダー自尊心が高い場合 (+1SD) においてレズビアンのタイプによる単純主効果が有意であった ($F(1, 75)=24.65, p<.001$) のに対し、ジェンダー自尊心が低い場合 (-1SD) はレズビアンのタイプによる単純主効果は非有意であった ($F(1, 75)=2.57, ns$)。Figure 3 に示されるように、統制条件では、ジェンダー自尊心が高い場合、男性的レズビアンよりも女性的レズビアンに対してより強いポジティブ感情を示す傾向が顕著にみられ、ジェンダー自尊心が低い場合、レズビアンのタイプによる違いが消失していることがわかる。

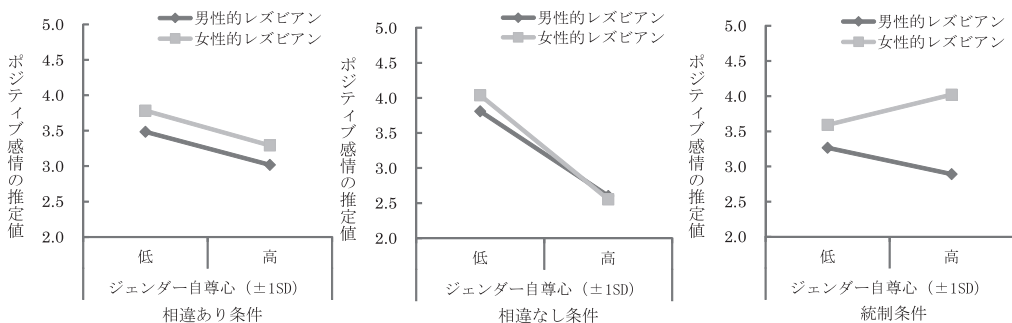


Figure 3. 生物学的情報の各条件のレズビアン各タイプに対するポジティブ感情におけるジェンダー自尊心の効果

レズビアンに対するネガティブ感情 (Figure 4)

ジェンダー自尊心の主効果が有意であり ($F(1, 73)=5.97, p<.05$)、ジェンダー自尊心が高い

ほどネガティブ感情が低減していた。ただし、ジェンダー自尊心×生物学的情報の2要因交互作用は非有意であった ($F(2, 73)=1.53, ns$)。したがって、仮説1から予想される生物学的情報による調整効果は見出されなかった。一方、生物学的情報の主効果が有意であり ($F(2, 73)=3.42, p<.05$)、統制条件と比べて、相違あり条件でネガティブ感情が低減していた。

仮説2から予測される、生物学的情報×レズビアンタイプの2要因交互作用は有意ではなかった ($F(2, 73)=0.35, ns$)。ただし、レズビアンタイプによる主効果が有意であり ($F(1, 73)=16.33, p<.001$)、生物学的情報に関わらず、女性異性愛者は、女性的レズビアンより男性的レズビアンに対してネガティブ感情を強く示していた。

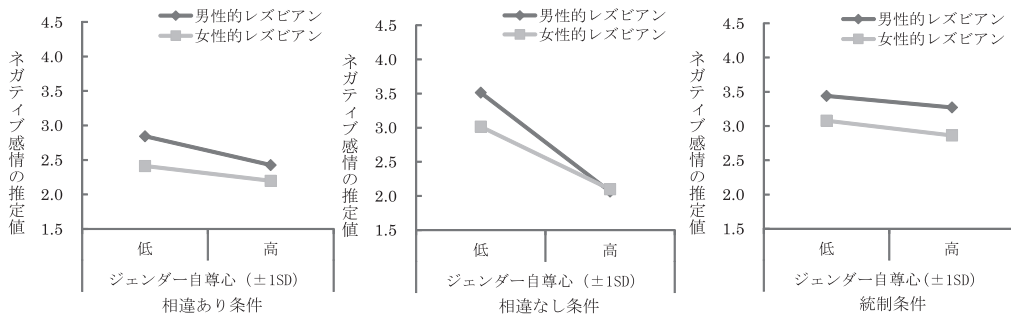


Figure 4. 生物学的情報の各条件のレズビアン各タイプに対するネガティブ感情におけるジェンダー自尊心の効果

考察

まず、仮説1が前提としている「女性異性愛者は、レズビアンを統制不可能な特徴をもつ支援すべき対象と考えており、レズビアンに擁護的態度を示すことによってジェンダー自尊心を維持している」という点は、従属変数間で幾分ばらつきはみられるが、概ね支持されたと考えられる。好感度については、統制条件において、ジェンダー自尊心が高くなるほど好感度が高まるという関係が認められており、ネガティブ感情については、実験条件を問わず、総じてジェンダー自尊心が高くなるほど、ネガティブ感情が低減する関係が見出されているからである。女性異性愛者においては、ジェンダー自尊心がレズビアンに対する肯定的態度を促進する側面があることは示されたといっていよう。この結果は、鈴木・池上 (2012a) の結果を大筋において再現するものでもある。ポジティブ感情については、予測とは異なり、全体傾向として、ジェンダー自尊心が高くなるほどポジティブ感情が低減する関係が示されたが、その関係は相違あり条件や統制条件ではみられず、相違なし条件において顕著にみられた。これは、レズビアン性の指向が統制可能と知覚され支援すべき対象とみなすことが困難になった場合には、ジェンダー自尊心と擁護的態度の間にある正の関係が消失するという当初の予想と必ずしも矛盾するものではない。

けれども、仮説1の後半にある生物学的情報による調整効果については、一貫する結果が得

られているわけではない。当初、統制条件でみられたジェンダー自尊心と好感度の関係が、性指向が統制不可能であるという認識を促す相違あり条件では一層明確になり、統制可能であるという認識を促す相違なし条件では不明確になると予想した。実際は、好感度について、相違なし条件では予想通り両者の関係が消失したが、予想に反して、相違あり条件でも消失していた。ネガティブ感情については、予想していた生物学的情報による調整効果は認められず、生物学上の相違に関する情報は機能しなかったといえる。ただ、統制条件と比べ相違あり条件ではネガティブ感情自体が低下しており、生物学的に相違があるという情報が、レズビアンへの否定的態度を緩和する効果を持っていたことを窺わせる。ポジティブ感情は、上述したように、概ね理論的予測に反しない結果となり、生物学的相違がないと伝えられた条件でのみ、ジェンダー自尊心がポジティブ感情を低減させていた。これらを考え合わせると、生物学上の相違に関する情報が、実験2で想定していたように、レズビアンの性指向の統制可能性（生得性）の認識に作用し支援や同情の対象ととらえる見方に影響を与えたかどうかについて、実験参加者が生物学的情報をどのように受け止め解釈したかを直接測定することによって、再度、検討する必要があると言わざるを得ない。

仮説2の前提である「女性異性愛者においては、男性的レズビアンは、女性的レズビアンに比べ、否定的反応が向けられやすい」という点は、概ね支持されたといえよう。好感度およびネガティブ感情で、生物学的情報に関わらず女性的なレズビアンよりも男性的なレズビアンに対する反応のほうが否定的である傾向が明確に示されており、ポジティブ感情においても、同様の傾向が、統制条件と相違あり条件において認められているからである。このことは、女性異性愛者が、レズビアンの性指向自体を問題視しない一方で、性指向以外の側面（趣味や嗜好、行動様式等）における女性役割規範からの逸脱に対しては、非難感情を抱くことを示唆している。ただ、このような非難感情が、ジェンダー自尊心の高い者ほど強まるといった結果は、ほとんど示されておらず、統制条件のポジティブ感情においてその兆候が一部認められただけであった。今後、対象を広げ、再度検討する必要がある。

加えて、このような性役割規範からの逸脱への非難に対する生物学的情報の影響に関しては、仮説2と合致する結果は全く得られていない。仮説2では、生物学的情報によりレズビアンの性指向が統制不可能であるという認識を促すと、規範からの逸脱に対する非難感情も緩和され、逆に統制可能であるという認識を促すと、非難感情が強まると想定していた。しかし、好感度とネガティブ感情においては、生物学的情報との交互作用は認められなかった。ポジティブ感情においては、統制条件および相違あり条件でレズビアンによるタイプの差（一部有意傾向）がみられ、相違なし条件でタイプによる差が消失するという仮説とは全く異なる結果が示されている（Figure 3 参照）。相違なし条件で男性的レズビアンと女性的レズビアンに対する感情反応に差がみられなくなった点については、次のような可能性も考えられる。生物学的に相違がないという情報により、レズビアンを擁護の対象とみなせなくなり、性指向以外の面では性

役割規範に沿っているとみえる女性的レズビアンに対しても、男性的レズビアンに対するのと同じように非難の感情が強まり、両者の間に差がみられなくなった可能性である。もちろん、これは推測の域を出ないため、上述したように、実験2で提示した生物学的相違に関する情報を、参加者である女性異性愛者が、どのように解釈したかを再度検討する余地があるといえる。

総合考察

男性異性愛者と女性異性愛者の差異

本研究では、男性異性愛者のゲイに対する態度および女性異性愛者のレズビアンに対する態度について検討を行った。その結果、それぞれの態度を規定する心理機制はかなり異なることが示唆された。

男性異性愛者については、当初、欧米での先行研究に基づき、ジェンダー自尊心が高いほど、ゲイに対して否定的になる関係が認められるであろうと予測していたが、そのようなジェンダー自尊心との関連は認められなかった。現在の日本の男性においては性指向が異性愛であることが男性性を構成する要素としてそれほど重視されなくなっている可能性が窺える。さらに、Herek (2002) は、男性がゲイに対して否定的な態度を示すのは、自分自身の男性らしさを示すために自分が異性愛者である（ゲイではない）と証明することを社会から強く求められているからではないかと述べているが、現代の日本社会においては、男性に対するそのような圧力は希薄であるのかもしれない。一方、女性異性愛者の場合は、女性性の中核である共同性とジェンダー自尊心が強く結びついているがゆえに、ジェンダー自尊心が高いほど、レズビアンに好意的態度を示すといった関係が比較的頑健に認められたといえよう。ただし、このような関係の発現に、同性愛を生得的で統制不可能なものとみなす心性が関与しているという点に関しては、支持する結果は得られず、女性異性愛者のジェンダー自尊心がレズビアンに対する擁護的態度を促進する心的過程は明らかにできなかった。

同性の同性愛者が示す性役割規範からの逸脱に対する反応も、男性異性愛者と女性異性愛者では、かなり異なっていた。当初は、双方とも性指向以外の側面で性役割規範から逸脱する特徴をもつ同性の同性愛者には否定的反応を向けやすいと想定していた。しかし、男性異性愛者においては、男性的ゲイと女性的ゲイに対する態度に差は認められず、むしろ、状況によっては、男性的ゲイよりも女性的ゲイに好意的になる傾向すら示されている。対照的に、女性異性愛者は、欧米の研究 (Laner & Laner, 1980) と同様に、女性的レズビアンに比べ、男性的レズビアンに対してより否定的反応を示すことが比較的一貫して見出された。女性は、レズビアンの性指向自体を非難の対象としない反面、性指向以外の側面については、伝統的な女性役割規範に拘泥することが窺われた。

こうした男性異性愛者と女性異性愛者の心理機制の差異がなぜ生じているのかは、現代日本

を取り巻く社会的状況によるところが大きいのかもしれない。今回、研究の対象とした日本の若者のうち、男性は、社会の中で、伝統的な男性役割規範（性指向が異性愛であること、男性的な行動態度をとることなど）に則ることをあまり強く求められなくなっているのに対して、女性は、性指向以外の面では、むしろ、従来からある女性役割規範（他者に思いやりや寛容さを示すこと）に則ることを求められているのかもしれない。しかし、本研究においては、現代日本の男女のジェンダー自尊心が何に規定されているのかといったことは同定できておらず、今後の課題である。

本研究の限界点と意義

本研究の最大の問題は、生物学的情報の機能を男女とも明確にできなかった点である。本研究で使用した同性愛者と異性愛者の生物学的相違に関する実験操作は、操作チェックの結果が示すように、その有効性が十分に示されておらず、今後改善する必要がある。もちろん、部分的にはあるが、実験条件による違いがみられているので、操作が全く機能していなかったわけではないが、その解釈は慎重に行うべきであると考えている。

さらに、感情の側面によって結果にばらつきがみられた。特に、女性異性愛者においては、好感度やネガティブ感情と、ポジティブ感情ではかなり異なる傾向がみられた。本研究ではその原因について明らかにはできないが、ただ、使用した項目の詳細をみると、ネガティブ感情（「嫌悪」「いらいらする」など）とポジティブ感情（「尊敬」「憧れ」など）が必ずしも意味的に対照的な関係になかった可能性があり、そのため、結果にばらつきが出たのかもしれない。また、本研究では同性愛者の態度における感情的側面に限定されていたことから、認知的または行動意図についても今後検討する必要がある。

本研究は、上述したように多くの課題が残されているため、ジェンダー自尊心と同性愛者に対する態度の関係を結論づけるには慎重にならなくてはいけない。ただ、日本の男性異性愛者のゲイに対する態度において、ジェンダー自尊心は規定因としてそれほど重要ではない可能性が示唆された。さらに、女性異性愛者においては、ジェンダー自尊心が高いほどレズビアンに対する態度が肯定的であるという関係が比較的頑健であることが示された。これまで同性愛者に対する否定的態度の規定因として考えられていた、ジェンダー自尊心を維持防衛する心理機制が、必ずしも普遍的なものではないことが示唆されたことは、そうした心理機制自体が緩和できる、さらには肯定的な態度を促進する要因に変化しうることを意味し、重要な意義があると考えられる。したがって、上述の課題を解決しさらなる検討を重ねることで、同性愛者に対する偏見に対し、ジェンダー自尊心の観点から解決策を提案できるようになると考えている。

【付記】

- 1) 本研究の一部は、日本社会心理学会第55回大会で発表している。
- 2) 実験1において、操作確認のために用いた同性愛者と異性愛者の生物学的相違に関する3項目について、信頼係数を求めたところ $\alpha = .39$ と非常に低い値であったため、合成変数にはせずに項目ごとに

1 要因分散分析を行い、実験操作の有効性を確認した。実験条件の主効果がみられた 1 項目を除き、他の 2 項目（「同性愛者と異性愛者は生物学的に異なっている」および「同性愛者や異性愛者であることは、生物学的には区別できない」）では実験操作の有効性は確認されなかった（順に、 $F(2, 60)=1.01, ns$ 、 $F(2, 60)=1.37, ns$ ）。実験 2 においても、項目ごとに実験操作の有効性を確認したが、実験 1 と同様に、実験条件の主効果が有意であった 1 項目を除き他の 2 項目では実験操作の有効性は確認されなかった（順に、 $F(2, 78)=1.16, ns$ 、 $F(2, 78)=0.86, ns$ ）。実験操作の有効性が認められなかった 2 項目のどちらにおいても「生物学的」といった言葉が含まれており、この言葉の意味が参加者に正確に伝わっていなかった可能性も考えられる。本実験においては、操作自体が有効ではなかったのか、質問項目の文言などの測定方法に問題があったのかが明らかでないため、仮説の検証のための分析を進めることとした。

【引用文献】

- Bonds-Raacke, J. M., Cady, E. T., Schlegel, R., Harris, R. J., & Firebaugh, L. 2007. Remembering gay/lesbian media characters: Can Ellen and Will improve attitudes toward homosexuals? *Journal of Homosexuality*, **53**, 19-34.
- Branscombe, N. R., Ellemers, N., Spears, R., & Doosje, B. 1999. The context and content of social identity threat. In N. Ellemers, R. Spears, & B. Doosje (Eds.), *Social identity: Context, commitment, content*. Oxford, England: Blackwell Science. pp. 35-58.
- Deaux, K. & Lewis, L. L. 1984. Structure of gender stereotypes: Interrelationships among components and gender label. *Journal of Personality and Social Psychology*, **46**, 991-1004.
- 土肥伊都子・廣川空美 2004. 共同性・作動性尺度（CAS）の作成と構成概念妥当性の検討—ジェンダー・パーソナリティの肯否両側面の測定— *心理学研究*, **75**, 420-427.
- Falomir-Pichastor, J. M. & Mugny, G. 2009. "I'm not gay....I'm a real man!": Heterosexual men's gender self-esteem and sexual prejudice. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **35**, 1233-1243.
- Glick, P., Gangl, C., Gibb, S., Klumpner, S., & Weinberg, E. 2007. Defensive reactions to masculinity threat: More negative affect toward effeminate (but not masculine) gay men. *Sex Roles*, **57**, 55-59.
- Haider-Markel, D. P. & Joslyn, M. R. 2008. Beliefs about the origins of homosexuality and support for gay rights: An empirical test of attribution theory. *Public Opinion Quarterly*, **72**, 291-310.
- Herek, G. M. 2002. Gender gaps in public opinion about lesbians and gay men. *Public Opinion Quarterly*, **66**, 40-66.
- Hidaka, Y., Operario, D., Takenaka, M., Omori, S., Ichikawa, S., & Shirasaka, T. 2008. Attempted suicide and associated risk factors among youth in urban Japan. *Social Psychiatry and Psychiatric Epidemiology*, **43**, 752-757.
- Hoover, R. & Fishbein, H. D. 1999. The development of prejudice and sex role stereotyping in white adolescents and white young adults. *Journal of Applied Developmental Psychology*, **20**, 431-448.
- 石丸径一郎 2008. 同性愛者における他者からの拒絶と受容—ダイアリー法と質問紙によるマルチメソッド・アプローチ— *ミネルヴァ書房*
- Kerns, J. G. & Fine, M. A. 1994. The relation between gender and negative attitudes toward gay men and lesbians: Do gender role attitudes mediate this relation? *Sex Roles*, **31**, 297-307.
- Kite, M. E. & Whitley, B. E. Jr. 1996. Sex differences in attitudes toward homosexual persons, behaviors, and civil rights: A meta-analysis. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **22**, 336-353.
- Laner, M. R. & Laner, R. H. 1979. Personal style or sexual preference: Why gay men are disliked. *International Review of Modern Sociology*, **9**, 215-228.
- Laner, M. R. & Laner, R. H. 1980. Sexual preference or personal style? Why lesbians are disliked. *Journal of Homosexuality*, **5**, 339-356.
- 鈴木文子・池上知子 2012a. 女性異性愛者のジェンダー自尊心とレズビアンに対する態度 *日本グループ・ダイナミックス学会第 59 回大会発表論文集*, 174-175.
- 鈴木文子・池上知子 2012b. 男性異性愛者のジェンダー自尊心と同性愛者に対する態度 *日本社会心理学学会第 53 回大会発表論文集*, 306.

Tajfel, H. & Turner, J. C. 1986. The social identity theory of intergroup behavior. In S. Worchel & W. G. Austin (Eds.), *Psychology of intergroup relations*. Chicago: Nelson-Hall. pp. 7-24.

Zajonc, R. B. 1968. Attitudinal effects of mere exposure. *Journal of Personality and Social Psychology*, 9, 1-27.

Appendix 1 実験刺激として用いた人物提示文

<男性的なゲイ>

Mは男性同性愛者(ゲイ)です。これまで男性との恋愛経験も何度かあります。

Mは、休日は、スポーツジムに通ったり、バイクの手入れをして過ごすこともあります。また、地元のフットサルチームに所属しており、練習にも積極的に参加しています。将来、大手企業の社長になることを目指しています。普段から、感情をあまり表に出さないほうで、人に話すときは理路整然と論理的に話します。

<女性的なゲイ>

Kは男性同性愛者(ゲイ)です。これまで男性との恋愛経験も何度かあります。

Kは、休日は、カフェめぐりをしたり、ミュージカルを観に行くこともあります。また、近所のフラワーアレンジメント教室にも通っており、教室の催し物にも積極的に参加しています。将来、ファッションデザイナーになることを目指しています。普段から、感情表現が豊かで、人とおしゃべりするのが好きです。

注) レズビアンについては、「男性同性愛者(ゲイ)」を「女性同性愛者(レズビアン)」に、「男性との恋愛経験」を「女性との恋愛経験」に変更し提示した。また、人物のイニシャルについても、SとEに変更した。

【2014年9月9日受付, 10月29日受理】

Determinants of heterosexuals' attitudes toward same-sex homosexuals: Gender self-esteem and gender norms.

Ayako SUZUKI & Tomoko IKEGAMI

The present study examines the relationship between heterosexuals' gender self-esteem and their attitudes toward homosexuals of the same sex. In Study 1, heterosexual men were presented with two types of homosexual men (masculine vs. effeminate) and asked to indicate their feelings toward them. It was shown that heterosexual men's attitudes toward homosexual men were, in principle, not predictable by either their gender self-esteem or the target (homosexual male) type. However, when they were informed that, biologically, homosexuals do not differ from heterosexuals, they reacted more negatively toward a masculine, as compared to an effeminate, homosexual man. In Study 2, heterosexual women were presented with two types of lesbian women (feminine vs. manly) and asked to indicate how they felt toward them. Specifically, the more positive the heterosexual women's gender self-esteem, the more favorable their attitudes toward lesbians were. Heterosexual women also tended to exhibit less favorable views of manly, as compared to feminine, lesbians. However, when informed that there are no biological differences between heterosexuals and homosexuals, a negative correlation between the heterosexual women's gender self-esteem and favorable attitudes toward lesbians emerged, and their favoritism toward feminine-type lesbians disappeared. Overall, the results suggest that psychological mechanisms that underlie the formation of attitudes toward same-sex homosexuals are quite different between heterosexual men and women in terms of the role of gender self-esteem and the function of biological information.